

【光は燭台の上に】

ルカによる福音書8章

8:16 「ともし火をともし、それを器で覆い隠したり、寝台の下に置いたりする人はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。

8:17 隠れているもので、あらわにならないものはなく、秘められたもので、人に知られず、公にならないものはない。

8:18 だから、どう聞くべきかに注意しなさい。持っている人は更に与えられ、持っていない人は持っていると思うものまでも取り上げられる。」

1) ともし火は燭台の上に置く

ともし火を灯すのは「暗闇」があるからです。暗くて見えにくい、暗くて不安があり、そのままでは心配に押しつぶされそうになるからこそ「ともし火」が必要になり火を灯すわけです。

そして火がともされると、必要なものが見えてきます。どこになにかがあるのかわかります。

お互いの表情も見えてきてホッとすることが出来ます。

そのともし火をわざわざ隠す必要はありません

し、そんなことをすればせっかくの明かりが使えなくなり、実に不自由、そして不自然なことになります。

一体これは何を教えようとしておられるのでしょうか。

前のたとえ、種まきのたとえと少し重ねて考えてみると「良い地に落ちた種が芽を出し始めやがて収穫のときが来たら、その収穫は自分だけのためではなく、周囲の人たち、家族友人知人立ちのためでもあります。

撒かれた種が芽を出したとき、それは喜びとな

り、他者にも知らせたい喜びになるのです。

でも、それを喜びと考えず、じぶんだけの秘め事と考え、誰にも知らせないということになると収穫の喜びは分かち合えなくなります。

御言葉の光は、まず、あなたの心にほのかな希望を伝えます。そして心が明るくなっていきます。

そのとき、そのことについて全く誰にも分かち合うことをしないと、神様に感謝もせず、イエス様に喜びを伝えることもしないままですと、いつの間にかその光のもたらした希望がとても小さなことにしか感じられなくなっていきます。

それは「自分で自分の成長を妨げている生き方」

「自分から生命を喜ぼうとせず、他者からの祝福や他者への祝福を遮断して、自分勝手な理解、自分勝手な解釈でみことばを「利用」しようとする生き方に通じているように感じます。

たとえば、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたも、あなたの家族も救われます」という言葉が聖書にありますが、それを聞いて「はい、私は救ってほしいですけど、家族の救いはありません」という解釈は、光を机の下に隠す発想と似ています。

闇があるからこそ光が必要なのに、その光を受けて、自分だけ、その光を受けさえすれば

他の人は関係ないと考えてしまうと、その光は、十分に作用しなくなります。

でも、そういうふうを考える人は少なくないように思います。

それは、いろいろな部分が人の前に明らかにされることになり「あなたはクリスチャンなのにどうしてこんな生き方をしているの」とか「あなたはクリスチャンらしくないね」とか批判されたり、ちょっと馬鹿にされたりすることがあるからです。

でも、そういう中でも光を保つことができるなら、間違いなく光は成長へと導き、自分の弱さや

足りなさを明らかにされながらも、打たれ強く、前向きに生きられるようになっていきます。

2) 聞き方に注意

聞き方に注意というのは、これらのたとえのまとめだと思えます。

前にでてきた種まきのたとえと並べて考えてみると、いくつかのことがわかってきます。

良い土地に撒かれた種の部分で

「8:15 良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」とあり、「立派な良い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して・・・」という聞き方が推奨されていました。

神の心を歓迎し、神の愛を喜び、神のしている見方で状況を見るという姿勢が重要だということになります。「光が届いた」とは「希望が手に入り、良い種が撒かれた」ということと同じです。

でも、その際、光が届いたあとの態度が重要な内容として教えられているのです。

信じればそれで良いのか、信じることだけがすべてなのか、というと、何をどのように信じたかが重要なのだということになります。

「私がイエス様を信じたから大丈夫」というのではなく、「光であるイエス様が、そして御言葉が然るべきところに置かれているから大丈夫」という自覚が必要なのです。

種が、私のような良い土地の上に落ちた、すごいだろう、という感覚で聞いてはいけません。

良い種が心に撒かれると、自分のことばかりでなく、近くの人に光を分かち合う意識が増えてくるものです。一緒に明るいところで分かち合おうとする心が広がってくる。

自分のことだけ考えて、自分のための光を自分のためだけに用いて封印してしまうと本来収穫が用意されているはずなのに、収穫が極度に少なくなってしまいます。それどころか収穫がゼロになってしまうことさえある。

良い土地に撒かれたという事実は素晴らしいこと。そこには収穫の希望があります。

しかし、それ自体を自分の誇りにしてしまい、自分の力で種がここに置かれたのだと錯覚し始めたり、自分だけのための収穫と決めつけてしまうと、収穫がもたらされなくなってしまいます。

光は自分のためでもあり、入ってくる人、光を必要として近づいてくる人のための安心、希望、平安にもなる。宗教的閉鎖性への注意として読む必要があるかもしれません。

つまり、「聞き方に注意」というのは「自分への御言葉、教え」として聞くのですが、それは自分だけではなく、自分からはじまって家族や友人たちとの関係にまで広がっていく聞き方をすることになります。

まずは、しっかり聴くこと、そして、それに対する応答を「イエス様に対してしっかり考え、生き始めること」さらに、周囲の人たちとの生活の中で、御言葉によって教えられた原則を土台に生きてみることにします。それを自分のためだけに聞くことだけで終わりにしてはいけないということになります。それをすると、そこで成長が止まります。

そこで芽が摘み取られてしまうことになるのです。

御言葉はその人の中で希望を生み出し、活力を生み出し、その人の生活や生き方、その方向性を変える力をもっています。結実のために種は撒かれています。

ですから「御言葉を聞いて嬉しかった、励まされた、恵まれた」それは素晴らしいことですが、その結果、あなたに「何が起こったの」「何をどうしていくつもりですか」というところを意識する必要があります。

そうでないと、聞き続けているが学ばない、聞き慣れているが実行しないという人になり、それは光を隠す人に通じてしまいます。あなたに何が語られ、それがあなたの生活の中で、どういう方向へと導き、促しているのでしょうか。その部分、すぐに実行できなくても、見方が変わるだけでも、重大な変化ですから「聴くだけ」で終わらないように心がけたいものだと思います。

あなたが誰かになにこやかに挨拶することができるようになったら「その相手はあなたの中に新たな光の存在」を認めることになるでしょう。

誰かに対する褒め言葉、感謝の言葉を伝えることができるようになったら、それを受けた人はあなたの中に何か新しい芽がでてきたことに気づくでしょう。

何が足りないか、それはあなたが一番良くご存知のはずです。

神様の愛と聖句の励ましで、一步踏み出し、他人と比較せず、他人になろうとせず自分の範囲内で「意識して善いわざ」を実行してみましょう。

神様に心を照らしていただきながら、相手を祝福する姿勢や言葉が豊かに育ちますように。

そういう祝福こそ、神様の望んでおられる収穫の一步だからです。

この言葉をしっかり心に刻みましょう。そして、何が語られているのか
自分の中で吟味してみましょう。

ルカによる福音書8章

8:16 「ともし火をともし、それを器で覆い隠したり、
寝台の下に置いたりする人はいない。
入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。

MACF 礼拝映像は

<https://youtu.be/e-dD0BV0pWs>